

講演会・全体会午前の部

司会者 ただ今より、講演会ならびに全体会午前の部を行いたいと思います。午前の部の司会を担当しますH中学校3年のi, 同じくH中学校3年のjです。よろしくお願いします。それでは、早速、講演会に移りたいと思います。演題は『出会いと表現』です。大湾 昇さん、どうぞよろしくお願いします。

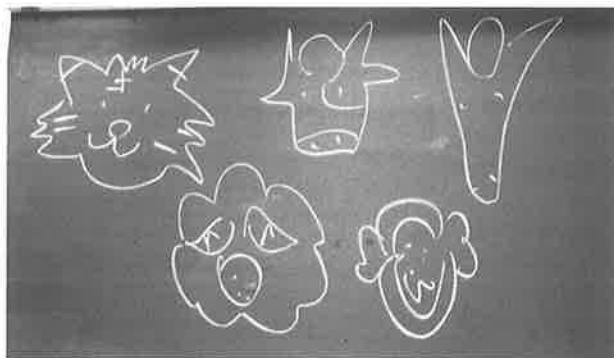


演題『出会いと表現』

大湾さん 大湾 おはようございます。最初に謝っておきます。ごめんなさいね。F中学校の子たちとか、N中学校とかD中学校の子たち、もしかしたら聞いたことある話をするかもしれませんが。どこでなにをしゃべったのか、僕も忘れてしまっているのです、知らないふりをしてください。それが人間の優しさだと思いますので、よろしくお願いします。

それじゃあ僕ね、特に今言うた学校の子たち以外はね、見たことも聞いたこともないっていう人が多いと思うんですけども、全国どこに行ってもまず同じことをすることから始めていきます。まず絵を描きます。これ、何描いたか分かりますか。“タヌキ”, ちがいます。わかります, “虎” ね。中一の子たち, 干支が寅年なんね。“牛” ね。“馬” “羊” “猿”。今, 5種類の動物描きました。“虎” “牛” “馬” “羊” “猿” ね。どんな理由でもいいです。み

んな一つだけ選んでくれますか。そして選んでもらった動物をもいっかい僕が一つずつ指し示していきますから、正直に手を挙げてください。先生方も協力的に手を挙げてくださいね。よろしくお願いします。はい、この中で“虎”を選んだ人。はい、続いて“牛”の人。続いて“馬”の人。ありがとうございます。“羊”の人。ありがとうございます。“猿”の人。はい、わかりました。ありがとうございます。“羊”の所で、国府中学校の中村先生が手を挙げてたんで、ここに中村って書いときます。じゃあ、選んでもらった動物、なんで選んでもらったかという、みんなが選んだ動物によって、大切にしている言葉、キーワードが分かる心理テストなんですよ。この答えあわせからいきたいと思います。まず, “虎”を選んだ人。ちなみに僕, この心理テスト初めて知った時に、自分は“虎”を選びました。何で選んだか、自分自身が寅年生まれ, 36歳, 今年37歳になりますけれども、自分の干支っていう理由で選びました。中には阪神タイガースが好きだから選んだ人がいるかもしれませんが, “虎”を選んだ人はこういう言葉を大切にしているみたいです。読めますか, 「誇り」。「プライド」。「自分らしさ」。今風にいえば「自分大好き人間」が多いんじゃないかな、けっこうこの中で一番多かったのよ, さすが人権の会やから基本じゃ。続いて



“牛”の人は、はい、これじゃ、「家庭が大事」っていう人です。はい、次は、一番少なかったんだけど, “馬”の人は, 「仕事が大切」っていう人。みんなにとっては勉強とか部活とかになるかな。はい、順番変わりましたが、次は

“猿”。ちょっと“猿”を選んだ男子、手を挙げてみて。はい、女子は今手を挙げた男子覚えといてよ、はい、こういう子を好きになりなさい。この子たちは「愛が一番大事」っていうイケメンくんたちです。かっこいいな、いいぞ、はい、続いて国府中学校の中村先生を選んだ“羊”，ちなみに他の女の子たち、手を挙げて、羊を選んだ女の子。女の子って言よんのに、K先生、手を挙げない。あなたは女ちがう、はい。



女の子、みんなは「お金が大事」っていう正直な子じゃ。はい、こういう風に心理テストを行いましたけど、初めて見た人の中に、なんしに心理テストをこんな人権の会でするんかって思われた人がいるかもしれませんけれど、実はこれは、あるトリックを仕掛けることによって、ただの心理ゲームが、なぜ人権学習をしなければならぬのかが分かる参加型のワークショップに変わってるんですよ。わかります？トリック仕掛けとるところ、分からん？受付の二人、分からんか。時間とってももったいないんで答え合わせしたいと思いますが、それは何かと言えば、ごめんよ、ほとんどの子は初めて会いましたけれども、嘘言いました。実はね、中村先生，“羊”が「愛」なんですよ。はい。“猿”が「お金」なんよ。“猿”が「お金」。答え、入れ替えてあったんよ。じゃあ、みんなに聞かよ。ねえ、何でここの答えが入れ替わっているということに気が付きませんでしたか。気付いて、大湾さん、ここの答えまちがってるよと言うことができなかったんでしょうか。そうそう、それはみんながこの心理テストの答えを知らなかった。高校生になったら勉強する「無知」つ

ていう言葉があります。知らないがゆえに、嘘の情報を与えられて、鵜呑みにしてしまったっていう現象がここに起こりました。これは遊び、ゲームですから全然たいしたことはありません。ただ、世の中には知らないがゆえに、知らないから、命にも関わるような、大切なことに関わってくる、悲惨な出来事が起こったりします。たとえば同和問題です。同和対象地区について何も知らない人がいたとします。その人に、同和地区の人ってこわいんでよ、貧乏なんでよ、差別されてかわいそうな人たちの集まりなんでよって教えたとします。するとどうなるでしょうか。知らん人は信じませんか？この心理テストと同じ状態が起こるんですよ。今みんなが何でこんな講演会を聞くのか、授業を受けるのかっていうたら、この知らないを知っているに変えていって、そして「あなたが言ってることまちがってるよ、そんな人ばかりじゃないよ。」って言えるような差別を無くしていける立場の人たちになっていくために、勉強してるんですね。世の中には、知らないことでさせられている、起こっている悲しい事件がたくさんあるっていうことを知っておいてください。それを分かってもらうために、僕はいつも講演会でアイスブレイキングでね、心理テストをやる



ところから始めていきます。で、もう一つはやっぱり人権問題講演会とか、ほんなんになつたらな、みんなえらい！何でかっていうたら、C中学校の子とかな、みんな前に座ったりな、近くに座るんやけどな、この間な、高校の先生に講演会させてもろうたんよ。ほしたらな、前が空いとんよ、教える立場の人たちが前にけえへ

んのよ。ほんなんでええんかな、自分が授業になったら、子どもたちが前に座らなかつたり発表せんかつたら、なんしに手挙げんの、なんしに意見言わんのって言うんちゃうんかなと思います。ほんな風な人に僕はなりたくないなっています。子どもの頃から、一つだけ守っているルールがあります。それは自分になりたくない大人には絶対ならないってことです。もう36歳でええおっさんですけど、だけど僕は子どもの頃からこの人のこういう部分は見習わないでいこう、こういう風に生きていったら僕はこんな人みたいに自分が嫌う原因を作ってしまうんだっていう風なことを思っ生きてきてます。だから、悪いところもあると思うんですけど、できるだけ人の悪いところを見て、自分をよくしていこうって考えていますので、みんな変わっていけるっていう風なことを知っておいてください。

続いて、紙芝居をします。



「昔のきまり」

昔、昔、あるところに、小さな小さな王国がありました。

その国を治める王様には、ライト王子、レフト王子という二人の息子がいました。

ですが、王様は、ライト王子をたいそうかわいがりましたが、レフト王子にはちっとも目を向けませんでした。なぜなら、レフト王子は、王様とはちがう左ききだったんです。

ある年、はやり病で多くの国民が死んでしま

いました。また、王宮でも、そのはやり病でライト王子が死んでしまいました。

「次の国王はライトに。」と考えていた王様は、世継ぎを失った悲しみで、ライト王子の後を追うように死んでしまいました。

そして、一人残ったレフト王子が、新しく王様になったのです。

この国では、「新しく王様になると、ひとつ新しいきまりをつくる。」という古い古いならわしがありました。

そこで、今まで人の愛情を知らずに育ったレフト王は、突然、こんなきまりをつくったのです。



「右ききの者は右ききと、左ききの者は左ききの者としか、かかわってはいけない。」

このとんでもないきまりを守らないと、死刑になってしまいます。

国民たちは、大変困りました。親も、兄弟も、家族も、友人も関係なく、この日を境に「右ききの集まり」「左ききの集まり」に別けられてしまいました。

もちろん、話をする人も、結婚相手も、入っている店までもが、右と左に別けられてしまったのです。

初めは嫌がっていた国民でしたが、しだいに、「右ききのやつら」「左ききのやつら」と、互いを嫌うようになっていきました。

月日は流れ、きまりをつくったレフト王も年老い、亡くなりました。

そして、次の新しい王様は、面倒なこのきまりをなくす、新しいきまりをつくりました。

もう、右も左も関係なくなったのです。

でも、それから500年以上もたった今でも、王国があった地方では、「左ききのやつとは、話をしてはいけない。」とか、「右と結婚しては駄目。」と、いまだに言う人がいるそうです。

もう、きまりなんてないのにね。



というふうなお話です。ありがとうございます。それじゃあね、一つだけポイントを押さえてください。レフト王子の存在です。みんなにも利き腕ってあると思いますが、それは「選んで生まれてきましたか」っていうことです。我々は生まれてくる時にどうしても選べないものってたくさんあると思うんですよ。どんな親の元に生まれるとか、どんな場所に生まれるとか、利き腕とか、男か女かとか、同和地区であるとか、地区じゃないとか、障がい者であるとか障がい者でないとか、そんな風なことはね、生まれてきてから自然と決まってしまう部分です。そんな自分自身ではどうしてもできないことを、悪く言うことを差別っていいです。世の中にはね、差別をしてしまう、違いを認められない人間がおったりします。そんな風なね、弱い人にはなりたくないなって思います。ほれと、さっきね、心理テストの時に言い忘れたんやけど「無知」っていう、知らないっていう言葉を書きましたよね。知らないことが悪いのか？悪くないんですよ。最初、人間、何も知らないんです。僕も知らないこと、たくさんあります。だけど、自分が知らない、気付いてなかったって知った時に、それを直そうとしない弱い人間がいたりします。そんな風な人間にはなりたくないなって、自分の弱さを認められる強さを持

ちたいなって思っています。それではね、僕、こういう話から始めていきたいと思います。

カツカレーの話をしてと思います。僕は深夜番組が大好きで、いつも2時3時に寝ます。ほんで夜中ずーっとテレビ見てると、日本一おいしいカツカレー屋さんのテレビをしていました。ほれを見ながらね、よだれ出しながらね、うまそうやなーっと思ってみていました。だけど、2時3時にカツカレーを食べたら、これ以上太ってしまうということで、食べるのをぐっとなガマンしました。そして、次の日のお昼ご飯にカツカレーを食べようと強く決心をして、僕は寝ました。そして、僕は今現在、C中学校にもお邪魔しましたけれども、E中学校というところでバスケットボールの指導をしています。この間、落成記念で新しい体育館にお邪魔させてもらったんやけども、その時は土曜日の午前中やって、バスケットの指導がありました。それが終わって、カツカレーを食べに行こうとしました。で、僕が教えているのは女子です。ほんで、女子しか教えません。男子には教えない。男子には、教えないんやけども、教えない男子の中に、今年中学校3年生の、うちの甥っ子がいます。当時、このカツカレーの話があるんは、うちの甥っ子が中学1年生になる、春休み中に起こったことです。1年半ぐらい前の話なんですけれど、甥っ子がおったから、言うたんです。「おい、おっちゃん、今からカツカレー食べに行くけれども、一緒に行くか。」って言いました。すると「行く。」って言うから、ほなすぐに着替えて、うちの家に集合なって話して、お互いがうちの家の集合場所に集まりました。で、着替えを済ませて、行こうとしました。するとね、うちには80歳のおばあちゃんがおる、そのおばあちゃんが言うんです。「昇さん、どこ行くんで」っていうから、「いや、うちの甥っ子、Yとカツカレー食べに行くんですよ。」って言いました。そしたら「あつ、私も行く。」って言いました。「ほな、ええわ。ついてきない。ごちそうするわ。」って言いました。

で、車に乗って走り始めました。うちから15分ぐらい走ったらね、ココスのカレー屋さんがあります。ほこへ行こうとして、あと2、3分で着くっていう時です。後ろの席に座っていたおばあさんがのそと僕の横に顔を出してきてね、言うんです。「昇さん、私あんまりカレー好きでないよ。」って言い出したんです。「えっ。わいは昨日からカツカレー食べたいし、あんた、さっき食べるいうたやん。」って、僕のお腹はカレーが食べたいモード全開です。カレー以外食べたくない。ほなけど、うちのばあさんがカレー食べたくないっていうから、仕方なしに和食屋さんについて、カツカレーを食べられませんでした。「くそーっ。」って思っていました。ほれが終わった後、だけど、みんな、ココスのすぐそばにな、みんなも知つとるとおり、石井のフジグランがあります。あそこへ行って、ちょっと買い物しようかっていうことになりました。それで3人で歩いていると、うちの甥っ子が「靴がみたい。」っていうから、フジグランにあるABCマートっていうね、そこへ行きました。ほんで、うちのばあさんが婦人服を見たっていうから、婦人服売り場へ行きました。



ほんで、その婦人服売り場の前にあるイスに僕は座って、待っていることにしました。そこで、僕はヒマヤから、ケータイでも触って遊びようかなって思った時、ふっとこちらを見るとね、3人、ちょうどいいわ。役割してよ。僕の座った横に、またな、若い女の子が3人おるんよ。年齢は、みんなより少し年上、15、6歳、高校生に入るか入らんかぐらいの若い女の子たちが横にいました。そのうちの一人がじーっとこ

っち見よんじゃ。「えっ？」と思った。別にこっちをにらんでるわけじゃない。僕は人に見られることがよくある。何でかっていうたら、こんな講演をやってるっていうこともあるし、バスケットボール部の試合とかよくついて行ったりするから、よその学校の人が覚えてくれとったりするんよ。フジグランに行く前の日も鴨島のTSUTAYAで「あ、大湾さんですね。この間うちの中学校に講演に来てもらいました。」っていう中学1年生の男の子たちと会って、そんなこともあったから、ああこの子も知つとる子かもしれないと思って、「ごめん、知ってる子？」っていいました。するとその子、知らんよって言うん。『知らんのやったら見るなよ』って思うたんやけど、またほうやっていうたらケンカになるから止めました。「ごめんよ、知つとる子かと思ったけん、気になったんよ。許してよ。」って言うて、また携帯いじろうと思った瞬間に、真ん中の子です。真ん中の子が僕に言うてきたんです。「何で両手に指輪入れてるんですか」って言うて来たんですよ。「ああ、どうでもいい話なんやけど、まあこういう理由でな。」というところから話が始まりました。そしたら「何歳ですか」、「結婚してるんですか」、「子どもさんいるんですか」とか、そういう話が初めてあった子やったけれど5分間ぐらい続きました。5分続いたところで、今までじっと携帯いじりよった子、始めに話しかけてきた子なんですけれども、ずっとこいつは携帯いじりよった、僕の方には見向きもしませんでした。ですけど5分たったときにいきなりこいつが僕に言い出しました。「メルアド教えてください。」「えっ、あかんよ。」って言いました。はじめて会った子やし、僕も変な援助交際とかにメールが来たりしても嫌やから教えないって言うたんよ。ほんで「ごめんよ」って言いました。ほしたら、その子「ふんっ。」っていう感じで、振り向くんよ。お前の方が「ふんっ。」じゃわと思ひながら、そこでおったんやけれども、ほしたら、また、その子が、話しかけて来るんよ。

トータル10分ぐらい話しました。初めて会った子と10分ぐらい話して、それまでずーっと和気あいあいとしとったんでよ。仲良くしよったんでよ。にもかかわらず、その真ん中の子です。その子が突然、こう言うて来たんです。

「すみません、カツアゲしていいですか。」って言うてきたんです。「カツアゲ？」って思いました。わかる、ぼくその当時な、35歳やったんよ。35年間生きてきて1回もカツアゲあったことなかったんよ。生まれて初めてのカツアゲっていうのが、15、6歳ぐらいの若い女の子3人組、しかもカツアゲしていいかどうか尋ねてくれるごつつい丁寧なカツアゲでした。わかります、こんな初めてじゃ、カツアゲって「オイ金出せや。」ってこう襟首縛られるようなイメージがあったにもかかわらず、すごい丁寧なんよな。丁寧にしてくれるから、僕、丁寧に断りました。「ダメですよ。そんな風に人にカツアゲするんはダメ。自分が働いてほしいもの買いなさい。」って言いました。するとその子、もう一回ねばってきた。いやいや、私たちにね、あそこにある10円入れてガチャガチャってやったらコロッてガム、丸いん出てくる、あれな、ああーってうなづいてくれよるな、いいな、お前な、あの転がってくるガム、あれを私たち3人に1個ずつ、カツアゲさせろって言うんよ。ね、「30円かー」って思いました。さあ、ここで、後ほど使うんやけど、これが、すごく大切な、三角形底辺の定理って言います。まあ、これはあとで説明するからね。ここで書いておきます。あとで大切な三角形底辺の定理っていうのに結びついてくるんだけど、ちょっとここにおいといてください。「30円カツアゲさせてください」って言われました。この瞬間、僕の心の中、正直揺らいだんよ。「30円ぐらいやし、いいか。」って思うた。10分間話もしたし、楽しい雰囲気も味わったから、30円ぐらいいいかって思いましたけれども、あーやっぱりだめって断りました。なぜか。今この子たちに30円カツアゲさせてあげたら、こ

の子たちは違う人に次、100円を要求すると思うたん。それが今度成功したら、次は500円。千円。へたしたら、警察のやっかいになるような額を違う人に要求するなと思いました。今ここで初めての時に「ダメ！」って、大人が示して挙げなければいけないなって思ったんで、僕は「ダメ！」って言いました。その時一瞬、僕の中にあつた、「大人」とか、みんなに



もあると思うんですけど、そこへ出てくる、こんな言葉があります。「建て前」。「建て前」って何かっていったら、表向き、よく見てもらおうっていう考え方です。僕は内心思いました。30円カツアゲさせてあげなかったら、ケチなおっさんって思われるん嫌やなって思った。だけどね、思うたんよ。ケチって思われてもいいわって。今一瞬思われたって、この子たちが将来警察のお世話になるぐらいだったら、ケチなおっさんで通してやれって。そんな風に、今一瞬よく思われることより、この子たちのこれから先の長い人生の、50年ぐらい、60年ぐらいの方が大切じゃと思って、自分の「建て前」を消して、嫌われるおっさんになろうと思いました。ほんでね、僕、説教大好きなんよ。こいつらに1時間説教してやろうと思ってな。「オイコラ！」っていきかけた瞬間に、「大湾先生！」っていう声が聞こえたんよ。すると、僕が教えてたバスケットの教え子、高校生の子でした。「あつ、久しぶり。」ということで、この3人は無視して、その子とずっと話するようになりました。すると、うちのおばあさんが婦人服売り場から戻ってきて、うちの甥っ子Yがま

るで安全を確認したかのようなタイミングで戻って、その後、3人には話することはありませんでした。ただ僕がひとつ気になったのは、その「建て前」の部分もあったけれど、「わー、カツカレーを食べに行ったら、カツアゲにあうんだ。」というふうな話です。お後がよろしいようで。失礼しました。それでは三角形の話に戻りたいと思います。これは何かっていうたらね、アメリカのお話です。アメリカの方で、みんなこんなイメージない。アメリカ、ニューヨークとかの地下鉄で、スプレーとかでいっぱい落書きしてあるイメージない。あれをね、一回全部消したんよ。うん、あの落書き、公共物に



落書きすることはよくないから、全部消したんよ。すると、どうなったかっていうたら、そのニューヨークで起こっていた、全体の犯罪率が、ぐっと減ったというふうなことです。落書きぐらいの軽い犯罪です。ですけど、その三角形の底辺ね、下の方を無くすことによって、重度の犯罪。重度の犯罪、これが減るっていうようなことなんです。これを三角形底辺の原理っていうんです。だから、みんなの学校で、ちょっと、もし学校全体が荒れてるなって思うたら、先生方もしっかりとやってほしいのは、掃除をするっていうことです。学校の子どもたちが荒れてガラスが割れとって、すぐに直さなければならぬっていうことです。こういう風な周りが荒れた環境、「ちょっとぐらい、いいわ」っていう環境を許すことによって、「ちょっとのこと」が「少しぐらいいいわ」、「これぐらいいいわ」、「こんな事ぐらいならしてもいいわ」って、下手したら命に関わるような悪いことに発展して

いく、それを防ぐためにもしっかりと、この最初の初歩の悪いところを注意してあげるっていう風なことが大切です。で、できたのは偶然にも、僕は知りませんでしたけれども、偶然にも僕がやったことは「建て前」を気にせず、やったことがこの三角形底辺の定理につながることであったんやなあっていうふうに思いました。いけますか、ほなね、今日ほんまに60分ぐらいしかないのに、さらに時間が減っちゃいました。で、いろいろとしゃべりたいことはあったんですけども、あの一ひとつだけ、うちのバスケット部の女の子の話だけ、さしてもらいたいと思います。これはF中学校の子たちの前では話したことを今思い出しました。ほなけど、まあ、知らんふりして聞いてください。で、キーワードは二つ出てくるんだけど、Tシャツっていう部分と、あとひとつはあとからにします。Tシャツの事件から話したいと思います。僕はバスケットボールの指導をし始めて、もう15年ぐらいになります。まあ、うちの中学校のバスケット部を教え始めて、8年、9年になります。ずーっと大学を卒業してから、バスケットを教えています。ほんでね、その中学校1年生の女の子、女の子の名前はM子とします。M子ちゃんのお話です。M子ちゃん、夏休み、ちょうど今ぐらいの時期です。ちょうど今ぐらいの時期に、僕がバスケット部の指導に朝9時40分くらいに行きました。するとね、うちの中学校1年生のM子が、当時の顧問の先生と何やら言い争いをしています。何の話し合いをしようんかなーって聞きました。するとM子はどうも、こうやって言いようんです。「先生、なんしにうちのE中学校、体育する時、部活動する時、そういう時は体操服、もしくは白のTシャツ、ワンポイントまでっていうルールがあるんえ。」って聞いてました。すると顧問の先生、M子にこうやって言うてました。「校則で決まっているんだから守りなさい。」って言うんです。で、M子がこう言うんです。「いや、校則で決まってるんは知っとるよ。知っとるけど、どうしてそう

いうルールができたの。」っていう風なことを聞きました。すると顧問の先生、「いや、校則で決まっているんだから、もうほんなんいちいちゴチャゴチャ言わん！もう従う。それが正しいの！」って、もうずーっとそういうことしか言いません。で、ずーっとそういうやりとりをしよるうちに、顧問の先生がM子にこうやって言いました。「M子ちゃん、どうしてあなたは白いTシャツが嫌なの。」って聞きました。するとM子はきっちりと中学生の女の子らしい、きちんとした答えを言いました。こう言うたんです。「ほなってなあ、先生、私ら部活しよるで。部活しよる時にな、こう走りよったら、白いTシャツやったら、汗いっぱいかいて、体にTシャツが張りついて、ブラのラインが透けて見えて、恥ずかしい。」って言うたんです。年頃の女の子らしいきちんとした理由です。だから恥ずかしいって言いました。僕はほれを聞きながら「ほう、M子、ちゃんと自分の意見をもっとるから、顧問の先生に尋ねよったんじゃ。」って僕は思いました。「恥ずかしいから白のワンポイントのTシャツまで、無しにしてだ。もう派手なん着てけえへんけん、黒とか、紺とか、グレーとかOKにしてだ。」すると顧問の先生、



指をさすんです。「M子ちゃん、ご覧なさい。こっち側では女の子が練習してるでしょ。向こう側見てみなさい、男子が練習してるでしょ。」半分からこっち側、女子が練習してました。半分の向こう側、男子が練習していました。あんなたちみたいな若い女の子たちが、赤や黄色や緑や、そんな派手なTシャツを着てきたとする。向こう側における男子が興奮するやろ。」って言

うたんです。分かる？僕、これ聞いて、うちの男子は牛かって思いました。ほんな色着いてきたからって興奮やるかって。むしろ女子がブラ透けとる方がよっぽど興奮するわって、思うやろ。何、ハニかんどんよ。かわいらしいのう。ほういうもんなんです、男っていうのはね。で、ほれを聞いてM子は「ああ、なるほど。」って言うたかというね、ほんな訳ありません。先生に向かってこうやって言いました。「意味分からんし。」って言いました。舌まいて「意味分からんし。」って言いました。ぼくやって「意味分からんわ。」って言うわって思いました。ほんで、この先生、もうこれ以上言いようがないって思うたんで、僕が「先生、僕が代わります。」って僕がバトンタッチしました。で、M子に聞きました。「M子、お前はまあ、嫌な理由は分かったんやけど、何でお前自身がその校則ができたのかっていう風なことを考えたか。」って言いました。するとM子は「考えたけど分からんかった。」って言いました。「考えたんやな、まあええわ、考えずに言うてきたんなら問題やけど、考えてきたんならかまわん。ほんな、とりあえずTシャツはおいといてくれ。Tシャツのことはほっといて、ルールが必要かっていうことだけ考えてみよう。な、ルールは必要やな。クラスは何人おるん。」って聞いたら、「35人。」って言いました。「35人の生徒を一人の先生が見よんだろ。な、ルールがあるから見ることができるんじゃ。ルールがなかったらお前やみたいなイノシシみたいな子やな、一人で見れるわけない。ルールがあるから一つのクラスをまとまらせることができ、勉強することができるんだろ。」って言いました。「そうじゃ。」って言いました。分かる、さらっと流したけど、うちの生徒たち、僕にイノシシって言われても全然反応せえへんのよ。ほれぐらい打たれ強くなっています。「だから、ルールは必要。ほな話をTシャツに戻そうか。Tシャツがなぜあるかっていうたら、体育をするときは体操服、もしくは白のTシャツワンポイントまで。分かり

やすくていいじゃないか。ほれがな、もし、黒・紺・灰色・緑・焦げ茶、それはOK。それ以外はだめっていうルールだったらどうする。覚えれるか。」って言うた。「いや、覚えれん。」「だろ。白のTシャツワンポイントまで。分かりやすくていいじゃないか。」って言いました。M子もそれ以上、僕によう言うてくることができませんでした。ですけど、そのM子に対して僕はさらにこうやって言うたんです。「M子、偉いぞ!」って言いました。「賢いぞ!」って褒めてやったんです。だって、ほうよ。僕が、僕もそのE中学校出身です。出身の中学校へ行っている最中からずーっと白のTシャツワンポイントまで、二十年前から三十年前からずーっと一緒です。今のみんな、な、白黒テレビや見たことないやろ。な、カラーテレビもみんなの場合やったらハイビジョン化、地デジ化していつて、新しい時代じゃ。ほんな風にな、時代がテレビですら変わっていつきよる。にもかかわらず学校の教育はずーっと昭和のまんま。下手したら大正のまんま。そんな昔からの教え、たしかに必要なこともあるんやけど、変わってもええんちゃうかって思うようなルールたくさんあるんよ。だけどそうやってコロコロ、コロコロ変わっていつたら学校も変化して行かなきゃいけない。先生たちもその変化について行かなきゃいけない。大人たちも合わせていかなければいけないっていう風なことで面倒くさいから変えないルールいっぱいあったりするんよ。それでM子に、「今の時代やったら変えていつてもええんちゃうか。M子は、ブラのラインが見えて恥ずかしいっていう理由をちゃんと持つとるんやし、他にもほうやって思うとる子はおるはずじゃ。だから、ここで言うたことは正しい。けどな、顧問の先生に言うたからって変われんよ。お前らには、生徒会ってあるだろ。だから生徒会に言ってきちんとルールを変えなさい。ここで言うんでなしに学校全体で、そして先生方と話し合え。そして学校を変えていけ。」って言いました。するとM子、「分かった。

明日行く。」ってほんまに行きました。それからしばらくたってね、2学期の途中です。それまで白一色やったんよ。白一色だったのに、黒と紺がOKになりました。靴下の色が。わかる、世の中難しいんじゃ。ねえ、Tシャツのこと言うたにも関わらず、学校は靴下しか変えてくれなかった。だけど、それもすごい進歩やと思います。白や汚れも目立ってお母さんが洗う時大変やったりもします。だから、まあちょっとずつの進歩しかないけれど、ほうやって言うことによって変えられる世の中であるっていうことを知っておいてください。今頃、靴下靴下言うなよ、もう。言うた瞬間に「えっ?」って思えよ、もう。はい、続いてはこういうことです。



「身障」という言葉です、みなさん知ってますか。もともとは差別語でも何でもなしに行政用語。役場とかそういったところで使われていた言葉です。もともとは「身体障がい者」という言葉を短くした言葉です。分かります、日本の言葉ではね、日本の国では、長い言葉を短くするっという文化があったりします。木村拓哉のことをキムタクって言ったりするのと同じことです。そんな風に長い言葉を短くするっという文化がありました。だけど、「身障」という言葉、もともとは差別的な言葉ではなかったにもかかわらず、これがものすごく差別的に使われていた時代がありました。今から8年、9年ぐらい前の徳島県、みんなの大先輩が学生だったときに爆発的に流行っていました。どんな風に使うかっていうたら、自分よりテストの点が悪かった人間を見つけて笑いながら言うんよ。「お前、ほんな点数しか取れんのか。お前

の頭は『身障』並みやな。」って使うんです。何も無いところでコテンソッてこけた子とかを笑いながら、「何も無いところで転びまわって、お前の足は『身障』か。」これ、身体障がい者の人が話を聞いたらものすごくショックを受けるような、身体障がい者をばかにしたような使い方です。「アホ、ボケ、死ね」の代わりに「身障」って使いよったん。「アホ、ボケ、死ね」も使ったらあかんよ。けど、こんな差別的な言葉を使ってまで、「自分でこんなひどい言葉、言えるんぞ。すごいだろ。すごい人間なんぞ。」って見せかけるために使っていました。そういったことが流行っているって僕は知っていました。仲間から聞いて、どっかで流行っているっていうことは、うちの部活内でも起こることやなっと思っていました。すると起こったんです。11月の末でした。11月の末に、バスケの指導を終えて、僕、帰ろうとしていました。自分のバスケットシューズを脱いで帰る準備をしていました。するとね、僕が帰るところ、出口に向かう途中に、うちのバスケ部の部室があるんよ。ね、そこのドアが半分開いていました。子どもたちの声がちょっと聞こえてきたんですよね。その声はこうでした。「あんなー、Aくんて。」M子たちと同級生の一人の男の子の名前が出てきました。「あんなー、Aくんて…。」ちょっと声が小さくなったんで聞こえませんでした。しばらくすると「ほれって『身障』で。ワッハッハッハ。」っていう大きい笑い声が聞こえてきました。こりゃアカンなって思うて僕は帰ろうとしよったんを止めました。部室の前で立って待っていました。しばらくするとM子たち、中学1年生の子たちが5人出てきました。出てきたんで僕は両手を広げて「ちょっと待つて。」って言いました。「一つ確認させてよ。今、Aくんの名前と『身障』っていう言葉と、お前らの笑い声が聞こえて来たんやけど、部室の中で、お前ら、Aくんのことを『身障』って言うてばかにしよれへんかったか。」って言いました。するとM子たちは気を付けをして直立不動で頭

を下げて何も言い返してきませんでした。「言い返してこんって言うことは、なあ、言うたんやな。分かった。なあ、もう一つ確認させてよ。Aくんがみんなに何かしたんですか。」って言いました。すると、5人のそのうちの1人が首を横に振って「何もしていません。」って言いました。「何もしてないのに、何でAくんが『身障』って言うてバカにせなあかんの。」って言うたんです。Aくんには障がいがありました。発達の障がいがあって、普通学級ではなしに特別支援学級に通っている男の子でした。「この子が何かみんなに迷惑かけたの。」「いや、かけてません。」「だろ。お前らがな、なんしにAくんのこと『身障』って言うてばかにするんか、その理由教えてやろうか。それはな、Aくんやったら目の前で『身障』って言うたって気付へんからじゃ。もし気付いて何かやってきたとしても、悪口言うて来たとしても、暴力ふるって来たとしても、お前ら勝てるやろ。お前が最初っから、Aくんより強いって分かっているから、この子が弱いって分かっているから、だからバカにして、もっと下げて、この子を痛めつけて、あたかも自分が強い立場になったように思いたいがために『身障』って言葉を使って、Aくんのことをバカにしよったん。そんな情けないことするなよ。」って言いました。けどね、ほの時にほんまに言いたかった言葉は、こんな事ちゃうんです。ほんまに言いたかったことは、僕ここまで出とったけど、よう言いませんでした。そのまま帰りました。夜も遅かったからね、帰りました。それから2日、2日たって、ちょうど当時のうちの部員、11人おったんやけど、2年生と1年生合わせて11人全員が揃いました。全員が揃ったんで、「実は2日前、こういう事があってな。その時に一番言いたかった言葉、ここで説明するわな。聞いてよ。」って言いました。「あの時、ここまで出とって言いたかった言葉、それはこうじゃ。5人のうち1人だけです、『身障』って言うたのは。他の4人は聞いてただけ。賛同しただけ。黙ってた

だけ。笑っただけなんです。ね。だけど、僕が言いたかったのは、この聞いてた4人の中から1人でいい。『もうやめよ。』って言うてほしかった。僕が言いたかったのは『何でお前ら注意してやらなかったんな。』っていうふうなたった当たり前の一言です。それを言いたかった。だけどよう言いませんでした。分かる。その場面、想像してよ。自分たちは仲のいいグループでおる。その中で人の悪口言うて盛上がつとる。そんな場面で『もう止めよう。』って誰が考えても正しいことを言うた子に、今度今までずっとAくんに向いてたイジメの目が、今度正しいことを言うた、この子に向きませんか。ね、先生方も、こんな言葉、気軽に言わんといてくださいね。絶対に。この言葉はこうです。お前、注意してやれよって気軽に言うってことは、「あなたはAくんの代わりにいじめられなさい。」っていう風なことと一緒に。Aくんの代わりに死になさいって言いよることと一緒に。そうやと思うたから。僕はここまで出とってよう言わなかった。そんな無責任な発言、ようせんって思いました。言うべきではないって思って止めました。だけどね、もっと考えてくれ。当たり前だろ。当たり前のことが言えん、お前らの友達関係ってなんじゃって言ったんです。普通やったらな、ホンマの友達やったら、「あつ、注意してくれてありがとう。うん、私ら、今、何か気持ち悪い雰囲気じゃよな。人をバカにしよる雰囲気でおかしいよな。」っていう風なことになっていくのが普通なんです。それにならない。それにどんどんエスカレートして自分が乗っからなければ、今度は自分が排除されるっていう風なことがおかしいんです。だから、ちゃんと注意してやれよって、それが言えるような人間関係を作ってくれて頼みました。ここまで出とって言えんような、そんな人間関係、やめてくれって言いました。そして、もう一つだけ、僕、付け加えました。「ほなな、これから先、みんなにできること、こういう事をしてほしいっていうこと。みんなにできること、言

うよ。」って。「もし、みんなは弱い人間やから、同じようなことが起こるとする。『身障』やなかったって、『アホ、ボケ』言いよる場面があるとする。そんな場面に出くわしたときにな、『もう止めよう。』って言おうと思うたけど、その注意しようと思うた子、『この子やったら私の話を受け入れてくれる』と思うたら言うてあげなさい。けど、もし言おうと思うて、『この子受け入れてくれんなー』と思う、私より力が強いな、口がたつな、周りの子たちも私に賛同して、私に何か跳ね返ってくるなって思うたら、注意せずに逃げなさい。」って言いました。



その場所で絶対注意するなよって、僕言いました。「お前がその子の代わりにいじめられる必要はない。止めとけ。」って言いました。だけど、逃げてもいいから、逃げる代わりに、その逃げてる最中に、思い浮かんで一番信頼できる大人、一人でいい、その人に『誰それちゃん、Aくんがいじめられています。』って告げ口しなさい。」って言いました。みんなの代わりに、大人が対応します。思い浮かんだ人がお父さんお母さんやったらほれでもええ、学校の先生やったらほれでもええ、僕やったらほれでもええ。だから、大人に言いなさい。子どもで解決しようとして絶対するなよ。」って言いました。「しんどくなるんは、注意した子が絶対しんどくなるから、絶対するな。ほれだけ。今の命、大切にしてくれ。」って言いました。するとね、当時のバスケット部のキャプテンから、僕にメールが来ました。こんなメールでした。その子から来たメールはメルアド変えましたっていうメールだったんです。それまでその子のメルアドっていうん

はね、バスケットボールラブみたいなアドレスだったんですけれども、新しいメルアド見ました。するとこんなメルアドだったんです。「バスケ部・仲間・大事・V」っていうふうなアドレスでした。ああ、あの時の話、このキャプテンは分かってくれたんかなってすごく嬉しくなった。っていう風なお話です。ま、ホンマやったらね、中2中3の子たちのお話があったりしてね、もっとしゃべりたい事があったりするし、今のみんなと関わりのあるような話があたりするんやけれども、とりあえずここでM子の話は止めておきます。今現在、M子は高校も卒業して、社会人として働いています。元気にニコニコして、ものすごく仲間思いな子に育っています。それだけは伝えておきます。あと5分くらいになりました。5分くらいで何話しようか。ほなこの話だけしとこうかね。僕の大好きな女の子のお話をしておきます。ナツミちゃんっていう子の話なんやけど、ナツミちゃんっておる、ほらおるわな、そんな子のお話なんやけどね。この説明をして終わりたいと思います。とりあえずね。ナツミちゃんていうのは、



今から僕が3年前に出会ったすごくステキな女の子です。中学校2年生。どこの子かっていうとI県の子です。I県のI市の、ある中学校の女の子です。その子と3年前に出会いました。その学校に僕は講演に行きました。全校生徒350人くらいの、まあ、そこそこの規模の学校です。その全校生徒に話をしました。それが終わった後、控え室に戻って校長室に戻ってお茶をいただいていた。するとね、コンコンってノックがあつたんです。開けて入ってき

たのは、その学校の担任の、男の担任の先生が一人でした。その人が入ってきました。「大湾さん、いいですか。」って入ってきました。「ああ、どうぞ。」「ちょっとこの子の話、聞いたってください。」この担任の先生に腕引っぱられて入ってきたのが、ナツミちゃん、当時中学2年生でした。入ってきた瞬間から、ずっとボロボロ泣きっぱなし。目がボコッと腫れてね、もう泣き疲れてかわいそうなくらい泣いていました。「どしたの。」って言いました。そしたらナツミちゃん、こうやって言いました。「大湾さん、私は、死んでしまった人に何かできますか。」って言いました。そして、「その死んでしまった人を大切に思っていた人に対して、私は何かできるでしょうか。」って言うてきました。二つ。中2にしてはえらい哲学的なこと言うてくるな—って、難しいことやな—って思いました。「意味わからんから、もう少し詳しく話して。」って言いました。するとこうやったんです。ナツミちゃんのお父さん、お父さんっていうのはね、小学校の先生です。小学校3年の担任なんです。お父さんです。僕が講演に行く3日前です。3日前にお父さんが担任している3年生の男の子がダンプカーにはねられたんです。そして意識不明の重体で、ずーっと入院していました。で、僕が講演に行くその日の朝です。ナツミちゃんの家族、みんなで朝ご飯を食べよった。その時にお父さんに電話が来ました。その電話っていうのは病院からで、担任している3年生の男の子が、今朝、息を引き取りました。死にましたっていう風な悲しいお知らせでした。その知らせを聞いて、お父さん、その場所で泣き崩れたそうです。「わしの子どもが死んでもうた—。」って。「担任している子どもが死んでもうた—。」って、家族の前で泣いたんです。そしてナツミちゃん、泣いてるお父さんの姿を見て、胸がいつぱいになるんですよ。僕が、どうしてナツミちゃんを紹介したいかって言うと、ここなんです。ナツミちゃんのすごいところ、みんなも言えるかな。「私はお父さん、

好きです。」って。周りの人に平気な顔で言えるん。お母さん、好き。お姉ちゃん、好き。弟、好き。私、家族が好きなんですって、胸をはって言える子なんです。みんな言えますか。お父さん、なんか気持ち悪いとか、お母さん、ウザイとか、なんかそういう風なことは言えるかもしれないけれど、好きっていう言葉、すごくステキな言葉なんやけど、言えないんよね、なんで言えないんやろうか。ナツミちゃんは言えるんです。ほういう風な気持ちをもつとる子やから、お父さんが泣き崩れる姿で胸一杯。そして僕は講演の中でこんな事言いました。「命を大切にしましょうね。」って言いました。すると、ナツミちゃん、こうやって頭の中にね、今朝あったお父さんの姿がよぎりました。ああ、お父さん、あの時悲しい思いしとったな一つて思った瞬間に、講演聞きながら涙が止まらなくなりました。ほんで担任の先生に連れられてやって来た。で、僕は「分かった。事情は分かったよ。それじゃあ、一つずつ整理しようか。なあ、ナツミちゃん、まず一つ目。死んでしまった人に何かできるか。僕は何もできないと思う。残念ながら。」って言いました。できんよね。みんな、知ってます？死後の世界、行ったことある？ないよな。僕も行ったことはありません。もしかしたら、あるかもしれんけど、ないんかもしれん。そんなあるか分らんことを僕はよう言いません。だから、死んでしまった人には何もできないってはっきり言いました。「だけどね、お父さん、生きてるよね。お父さんには、してあげられるよ。」って言いました。「ナツミちゃん、家帰ったら、お父さんにお手紙書こう。」って言いました。「お父さんぐらいの年代の人やったら、メールで、娘からメールをもらうんも嬉しいかもしれんけど、絶対に手紙もらった方が嬉しい。手紙書こう。お姉ちゃんと弟がおるって言うたよね、だったら二人にも呼びかけて、3人で書こう。」って言いました。「できる？」って言うたら、「できます。」って。「姉ちゃんと弟、書いてくれる？」って聞いたら、

「書いてくれると思います。」って言いました。じゃあ、そうしよう、それなら三倍嬉しい。するとね、ナツミちゃん、それまで泣きよったのに、その顔がまるで晴れやかになって、そして僕と握手をして、帰って行きました。で、次の日、僕がI県から帰ってきて、そのナツミちゃんの学校に電話しました。「その後、どうですか。」って言いました。すると、「ナツミ、今朝、ニコニコ顔で学校に来ました。」って言いました。どうも夕べ、お姉ちゃんと弟にも呼びかけて、3人で手紙を書いて、お父さんに、「お父さん、元気出してね。私たちがいるよ。大好きよ。」っていう内容の手紙を書いて渡したそうです。それを聞いて、僕は嬉しく思いました。半分はね、小学校3年生の男の子が亡くなって悲しい話だけれども、僕はナツミちゃんの話聞いて、その姿を見てすばらしいって、いい家庭を見せてもらったなって思います。そういうふうな家庭があるっていうことを知っておいてください。自分たちの周りでは、もしかしたら、ウザイとか、うっとおしいとか言いよる子ばかりかもしれんけど、実はそういう表向きの言葉の裏に、本当は家族を大切に思っている人の方が多いっていう風なことです。我々がここで生きてたってられるっていうことは、悲惨なこともあるけれど、それを乗り越える力を持っているから立っていることができるんです。我々がなぜ幸せを感じることができるかっていうと、悲惨な出来事の何百倍も、幸せがあるから生きていけるんです。不幸な世の中かもしれせん。だけど、そのいいことを一つずつ見つけられるすばらしい感受性を持って、しっかりと人権学習を受けていってほしいなと思います。今からみんなの積極的な意見とか、質問とか、そんなこと、受けていってね、僕はいっぱい返していきたいと思います。とりあえず、僕から一方的に話す話は、終わっておきたいと思います。一生懸命聞いてくれてありがとう。ご静聴ありがとうございました。

(拍手)

司会者 大湾 昇さん、講演、ありがとうございました。それでは残りの時間、講演の感想や質問、意見交換を行っていききたいと思います。マイク係として、W中学校3年生のadさん、W中学校3年のawさん、そしてS中学校3年のayさんがフロアを回ります。記録の関係上、発表者は団体名、学年、名前を言ってから発表してください。それではよろしくお願いします。

A中学校 w えっと、感想は、大湾さんの話はとてもおもしろくて、分かりやすく、とても勉強になりました。ありがとうございました。



大湾さん T県やな、D町やな、一昨日、D町に行っとして、僕、D町に行く前にこっちの高校の先生にお話して、D町のN小学校の子たちに話をするんやけど、4時間でいかなあかんところを、ナビ設定したら5時間かかるってなっとったから、がんばってギリギリで行きました。ほんまは次の日、僕のバスケット教えてる子が、心臓の手術するんで今入院しとるんよ。昨日、小松島の方にお見舞い行って来たんやけど、ほのお見舞い行くときに、T県のおみやげ買っていくねって約束してありました。ほなけど、行くときに時間ないから買い物できんかったんよね。で、終わった後買い物したらええわって思って、9時半ぐらいに終わって、D町を出ました。すると、店、全部閉まっとるの。結局、僕、香川のお土産かなんか買ってからお見舞い行きました。

た。「ごめんね。ウソつきました。」って言いながら、「次は宮崎行くん、宮崎のお土産買って来るね。」って約束して帰ってきました。すばらしい自然いっぱいステキなところやね。ありがとうございました。

G中学校 e あの『身障』の話をしたときに逃げてもいいんで大人に言いなさいとおっしゃったんですが、大人に言ったら絶対「アイツがちくった」って言われるんですけど、どうしたらいいですか。

大湾さん 周りの人がちくったって言わすんはな、その信頼できる人をもうちょっと考えよう。それで済むことじゃ。分かる。私が信頼できる人、人権のことにちゃんと対応してくれて、自分の話をきちんと聞いてくれて、そしてみんなを守ってくれる、ほんまに信頼できる人。あつ、目の前にいたけん、この人に言おうって言うたら、もしかしたら失敗になるかもしれん。ほなけど、これは大切なのは、大人が今、言われたことですよ。先生方、分かります。ほれが、先生方が長年教師をしていった中で、きちんと身につけていかなければいけないテクニックですよ。差別とたたかうのは、口とか知識とかちゃうん。テクニックです。時にはずるがしこさも必要なんね。だから、ウソをつく場面もいるんよ。だから、僕は講演の講師やからウソつくはずないって言いながら、一番最初にウソついたやろ。あんな風に上手にできる人、ほれをちゃんと選定しな。選んでみな。絶対おる。その学校がいい学校やったら、絶対おる。いい学校ほど、いい先生が絶対おる。ろくでもない学校やなっと思うたら、小学校時代の人でもいいし、お家の人でもいいし、人権活動しよつたらいい大人いっぱいおるから、ほういう人に連絡とってみたらいいから、必ず連絡先を交換しときな。ほういうつながりで自分の命とか、周りの大切な人たちを守ってくれるようにな

るから。そういう人権のネットワークを活用するっていう言葉があります。これをちゃんとやってください。告げ口したっていうのがばれんようにしてくれる大人、見つけてくださいね。ありがとう。他ない？

Y中学校 I えっと、最後のナツミさんの話に私はよく似ていて、私は中2で、他の子はお父さんがウザイとか言うかもしれんけど、私はお父さんがとても好きです。おもしろいし優しいので、とてもお父さんが信頼できるし、とても好きです。ほういうのはナツミさんととても似ているなって思いました。

大湾さん ありがとう。世の中、おかしいよな。世の中おかしいって、僕はずっと思うんやけどな。素直に自分の気持ちを言うときに勇気いりませんか。悪ぶったこと言うときはさらっと言うことができるのに、素直に正しいことを言う時に勇気がある。おかしいよな。好きって人が言われてうれしい言葉やのに。ほれが言えん世の中、言ったら何やアイツっていうふうに言われる世の中を変えていくためには、しっかりと「好き」って言える人間が増えていく事じゃ。10人のうち9人が悪いことしよっても、そっちが正しいことをしよる気がするかもしれんけど、それが違うって、少ない人数でもそれが正しい場合があります。それをしっかりと判断してな、その場で言えんでも、人権の仲間とか、そういう信頼できる人って絶対おるはずやから、その人たちとしっかり話し合って、自分一人じゃない、仲間がおるって、しっかり思ってください。ありがとう。

W中学校 ad 最後のナツミさんの話で、ナツミさんがお父さんがすごい好きって言ったんですけど、オレはお父さん、すごい嫌いなんです。自分のために仕事してくれて、暮らして行くんに不便がないようにしてくれ

てると思うんですけど、ほれでもすごいお父さん嫌いなんです。で、その嫌いな理由が、お父さんは人種差別とか部落差別とか好きじゃないのに、むしろ差別はいかんよってみたいなんいってくる人のくせに、オタクを差別してくるんですよ。すごい嫌いなんです。で、自分は超オタクなんです、すごいオープンなオタクなんですけど、お父さんが「その年になってようアニメや見るなあ。」とか「オタクめっちゃきもいわ。」って言ってきて、オタク全然きもくないのに、ほんなんずっと言われ続けて、すごい腹立って、お父さん嫌いで仕方ないんですよ。で、お父さんに「オタクがきもいんじゃないって、ほの一、こういう表現は悪いんですけど、きもい人がきもいんよ。」って言ったんですよ。「だってオタクは犯罪犯すだろ。」って言い返されたんで「オタクが犯罪犯すんじゃないって、犯罪犯した人がたまたまオタクであって、オタクはなんも悪くないのに何でほんなんばっかり言うん。」って言ったんですよ。ほんなら「オタクはやっぱ気持ち悪いで。」って言うたんですけど、全然改善してくれないお父さんに何て言ったらいいですか。



大湾さん 分かりました。もう答えでとうで。「分かったよ。」でええと思う。ほなけど、これ、すべてを同一で見る。集団で見る心理じゃよな。オタクっていうものの悪い部分だけを見る、偏ったイメージを持ってるんよな。部落差別も一緒に。部落っていう中の、ごく一部の悪い事をする人たちのイメージが、全

体に染みついとるんと一緒じゃよな。だから、好きなもの、ずっとしよつたらええんで。お父さんが何や言うてきたって、「その部分はおかしい、けど他は好きよ。」でええんちゃうん。よく私のためにしてくれるんだろ。お父さんがお金くれて、そのお小遣いで好きなもの買えるんだろ。見に行ったりできるんだろ。

W中学校 a d けどなんか矛盾してませんか。

大湾さん 矛盾しとるよ。ほなけど、いきなり全部を求めようとする、そういう風にしていったってお父さんも今まで生きてきた中で、そういうオタクのいい情報が入ってくるような事ができんかったんよ。だから、これから先もお父さんにいいところ見せていけるようにしてあげなんたら。あきらめたら終わりよ。いきなり人は変われへんもん。

W中学校 a d あの、オレ、3年以上言い続けてきてるんですけど。

大湾さん うんうん。お父さん、何歳。

W中学校 a d えーと、44、43歳。

大湾さん ほうやろ。40年以上ほうやってオタクに悪いイメージを持ちながら生きてきとんよ。長いけど、ええやん。うざい時もあるかもしれんけど、うざくない人もおるかもしれんやん。認めてほしい気持ちは分かるけど。

W中学校 a d けど、お父さん自身も多分オタクなんですよ。

大湾さん 何オタク。

W中学校 a d 最近、お父さんはワンピース

ばっかり見よって、パソコンの壁紙もそのキャラばかりで、それでも自分はきもくないけどオタクはきもいって言い張ってきかないんですよ。

大湾さん 他から見たらあんたも一緒じゃって、言うて上げたら。

W中学校 a d お父さんも一緒だろっていうたら、「やっぱりオタクはきもいっていうイメージしか思い浮かばんわ」って言われ続けて、自分すごい息苦しいんですよ。



大湾さん 気にし過ぎちゃうかな。いけるよ。ほのうちな、ワンピースの話してあげたらええんちゃうん。「覇気身につけてからルフィーごっつい強うなったな」って言うてあげたらええんちゃうん。うちの家もワンピース62巻全部あるよ。ほんで8月に63巻出るんな。で、徳島のええところはな。全国に先立って土曜日にジャンプが出るころやな。他のところ、月曜日とか火曜日。沖縄なんか水曜日に出るんよ。僕の大湾って名前は、沖縄なんよ。もう全然違う話に行きよるけどな。沖縄から父ちゃん来とんよ。沖縄に親戚がおるんやけど、ある日、土曜日の飛行機に乗って沖縄に行きました。その飛行機に乗る前に、ジャンプ買いました。ほいでジャンプ持って行ったら、うちの従兄が、「えーっ、うちの方3日前にジャンプ出たばかり。何でもっとるん。」って言われてな。すごく喜ばれたんですけど。ほなあげるわって言うて、昇く

ん、いい人やねって言われたんやけど。まあ、
ぜんぜん違う話になっていきよるね。やけど、
まあ、しっかりとお父さんと共有できる
部分で話して行って、変わっていくよ。全部
いっぺんに返さそうとか、難しい。ほんと、
お父さんも娘の言いよること、もしかしたら
からかいよるかもしれん。もしかしたら、変
わらんかもしれんけど。ええんちゃうん、自
分は自分で好きなことしよったら。まあ、モ
ヤモヤする気持ちは分かるけど。認めてほし
い気持ちは分かるけど。いっぺんにはムリで
す。ゆっくり行きましょ。ね、ワンピースの
話してあげだ。もやもやしとるな。まあええ
わ。この話はお昼ご飯食べながらしよう。

W中学校 a f さっき話した a d さんとちょ
っと内容が似てるんですけど、私もオタクな
んですよ。方向がちょっと一緒、ある意味ち
よっと違うんですよ。そしたら、私が「この
人、好きなんよー」って見せるじゃないです
か。そしたら、ママに話すんですよ。そした
らママが「えーっ。」って言うんですよ。「で
も好きなんやけんええやん。」とか言いなが
ら、その人のこと言うんですよ。したら「ほ
んま a f ってオタクやなあ。なんで私とパパ
は普通やのに何であんたはオタクなん。」と
か、たまに家族でカラオケとか行ったりした
ら、ママとパパはまあうまいんですよ。で、
わたしはあんまりうまいんですよ。下手
なんですよ。そしたら「なんで a f ってほん
なに下手なん。」とか「何でオタクなん。」と
か「何で。」って言われるんですよ。別に家
族だからって、自分の娘だからって、『自分
と同じぐらいのことができると思うんじゃねえ
よ』って毎日思うんですよ。勉強とかもほ
うやし、何で子どもやからって自分のでき
ること、できたことを今までできると思うのか、
不思議なんですよ。てか、オタクってダメで
すか。

大湾さん ああ、結局そっちへ話が行くんじゃ。
(笑) あはは、ええんちゃうん。ほうやなあ。
結局はお母さんも娘に負けたくないだけちゃ
うん。

W中学校 a f いや、ママもママでオタクと
いうか、アニメじゃないけど、服とか、オシ
ャレが好きっていうんもある意味オタク。オ
タクっていう言い方してないだけでオタクっ
ぽい人ってけっこういるじゃないですか。

大湾さん こだわりがあるやつな。いろんなも
の、好きなものにこだわるってことな。
ほれが何かって言うん、それは人それぞれや
から、ええんちゃうん。ぼくも、趣味はカラ
オケです。一人で行くカラオケです。すごく
楽しい。ほやけん、僕一人で行くけど、行き
始めたんは、あそこ一番後ろにおる K K っ
てやつな。おるんやけどな。あの人が一人カラ
オケ行きよるって聞いて。まあ、僕も一人カ
ラオケ行きよるけん、二人で一人カラオケ行
こうかって二人で行って別室借りるんよな。
ほんな風なことして、1 時間思い切り発散し
ます。僕はいろんな歌うたいますよ。EXILE
も歌うし、コブクロも歌うし、嵐も歌うし、
3 代目 J soulbrother も歌うし。いろいろ歌
うん好きです。だから、ほうやって歌うたう
んが好きで、僕はどうして一人で行くんが好
きかっていうたら、集団行動するんがめんど
くさくなった時。自分がカラオケ行きたいっ
て思うとるのに、誰かと一緒にでなかったら行
けないっていうのおかしいと思えへん。今行
きたいんよ。ほんと誰それちゃん誘おうかっ
てしたけど、用事があって行けません。向こ
うやって都合があるからな。ほなカラオケ行
けない。そのモヤモヤした気持ちはどこ行く
の。だったら一人で行っちゃえ。そういうと
ころから始まりました。だから認めてくれん
かったりおかしいと思われる部分はあるかも
しれんけど、ほれは周りの意見であって、自

分からしたらごくごく当たり前。むしろ他人さんと、みんなと一緒になければおかしいって思ってるその人たちがおかしかったりするんよ。はみ出したこととか、違いを認められない、昔の日本人の閉鎖的な考え方をずっと継承し続けている人たちの考え方やと思うから、これから先、認められていく人は、同じではなしに、人と違うところを見つけられた人がすごいって言われるようになるんな。『ワンピース』書いた『尾田栄一郎』やってな、あれやって、今までにないことをするけん、ヒットするわけで。『トリコ』やってほうやってヒットするわけで。いろいろとヒットしていくのは、人と違うところ。ちがう視点で見つけられた人やと思います。それを認められるのは時間かかることかもしれないけれど、ほなけど、やっぱり好きなことは好きで、人に迷惑かけんのやったら続けていいんじゃないかなって思います。いいんじゃない。何オタク。(「声優。’) ああ、声優。いいじゃない。可愛らしい人、最近増えたな。特に女の子な。(「男性。’) あ、男性か。男性もかっこいい人、増えてきたな。昔はおっちゃんおばちゃんしかおらんかったのにな。

C中学校 a z C中学校, a z です。



大湾さん バスケット部や。見たことある。

C中学校 a z ナツミさんが大湾さんに問いかけた、亡くなった人に何かできること。私は、亡くなった人に対して、自分自身が忘れ

ないで思い続けることができると思いました。自分自身の心の中で、その人のことを忘れないで生きて行くのが、その人に対して一番できることかなって思いました。

大湾さん はい、ありがとう。そのとおりやと思うし、僕、省いたけど、実はナツミちゃんに言うたんよ。もし死んだ人にできることがあるとすれば、あなたが寿命の限り生きてあげることよって言ったんよ。その人のことを考えながら生きてあげることじゃ。それしかできんよって。具体的に物あげたりできんで。死んだ人は気付かない、気付くことはできんかもしれんけど、死んだ人を知ってる自分が、何ができるかじゃよな。東日本大震災が起こった時も、結局そこへ帰っていったんよ、みんな。被災した人たちに何ができるか、困ってる人たちに何ができるか、我々が考えた結果、最終的に考えついたんは、我々が一生懸命生きようっていうところに戻ってきました。それを我々がやろうとした時に、ついてこなかったんは政治家です。そんなふうにな、立場的にはできない、できにくい人もおったかもしれないけど、人間いろいろ考えていきよったら結局人のためにするんでなしに、自分を一生懸命生きることが人のためにつながらんちゃうかなって思います。バスケがんばってね。はい。ありがとう。

司会者 まだまだ発表できてない人もいますが、このあたりで全体会午前の部を終了させていただきたいと思います。ここで、北島中学校の森口先生から連絡がありますので、みなさん、少し聞いてください。

森口先生 大湾さん、ありがとうございました。ちょっと10分ほど時間をいただいて話をしたいと思います。お手元に「ひとごとからわがことへ」というチラシを配らせていただきました。後ろにパネルがあります。「人権

文化が触れ合う、共に生きる町づくり推進」
っていうね、そこに「差別の現実学ぶ」っ
ていう展示があります。後をご覧ください。
毎年、鳴門で「人権地域フォーラム」って
いうのを実施してます。これは、この集会で
活躍した中学生、そして高校生が、毎年参
加してくれて、二時間半のフォーラムで後
半90分は毎年フロアから意見を出してもら
っています。そこで毎年語ってくれる中
学生や高校生の言葉がね、様々な人た
ちの心を癒していきます。去年の写
真がありますけど、見ていただいたら分
かりますけど、年配の方がたくさんおい
でになります。その人たちにとっても
毎年様々な思いがそこに溢れていく。人
とつながる、出会う、そんな学びの場
になっていきます。この集会は17年前
にスタートしました。その時は、参加
しとる子がみんな同和地区の子だった。
地区外の子は一人もおらん。そういう
状態からスタートした集会です。「部
落解放」っていう名前を挙げた集会だ
ったんです。それが回を重ねてきまし
た。法が切れていく中で状況が変わっ
てきました。17年前、H町の子ども
たちが高校に行っても仲間づくりが
できるようにH町の子どもたちが中
心になって作り上げてきた集会です。
高校へ行って本当に切ない差別事象
が起こります。去年、この舞台に立
ってくれたAさん、彼が中学2年の
時にこの集会が始まっています。そ
の彼が、7年前ですね。大手企業に
就職していますけれども、就職して
すぐに、この近くの中学校出身の子
がですよ。徳島の同和教育を受けた
はずの中学生が、彼の道具箱に、同
和地区の人を黙らせてしまう、何も
できなくさしてしまう、絶対使っ
てはならない言葉を書くんですね。
「〇〇さわるな」って書くんですね。
それを見た瞬間、彼は体が震えます。
やっとこの仕事に就けて、2年3年
したら結婚したいと思うと。ボーナ
スがもらえる仕事に就けた。給料が
ちゃんともらえる仕事に就けた。そ
のことを彼の家族が喜んで

でいます。その道具箱を見た時に、「オ
レはこの職場でやっていけるんだろ
うか。どうなるんだろうか。」と。で
も、中学時代の仲間やこの集会の中
間に電話をし、つながった仲間に一
本電話をかけて、相談するんです。そ
の一本の電話で、その職場でぐっと
踏ん張っていく力を持つわけです。今
ここに部落差別の現実があります。障
がい者差別の現実があります。様々
な差別の現実と向き合いながらもね、
誇りと自信を持って生きていく。そ
んな人生を生き抜いてほしい。そん
な願いで積み上げられてきた集会
です。その意味を持って、午後の意
見発表を聞いて、自分のことを語
ってください。自分自身の生きざま
や生い立ちや不安や誇りや悲しみ
や、その自分の中にあるものを語
ってほしいなっています。今年の
パネリストの中に、Aさん、そして
中村陽子先生が、この集会にずっと
関わってくれている陽子先生が
パネリストになってくれています。
やっぱり教師の力って大きいです。
彼女が中学校を転勤して転勤した
先の中学生がこの会に参加していま
す。転勤しなければこの会に参加
することはなかったわけですね。先
生のつながりが学校全体の立ち上
がりになっていくだろうし、仲間を
いっぱい増やしていくんだろうと思
います。もう一人、岩井さんという
方が愛媛から来てくれます。12
年前に私は岩井さんと出会いました。
出会った時に、岩井さんは「先生、
息子に会ってくれ。」と言って、息
子さん連れておいでました。当時二
歳か三歳だったと思います。もう
本当に二歳ぐらいにしか見えなかつ
た息子さん。寝たきりのまったく言
葉のない息子さんを抱いて、「これ
が僕の息子です。」って連れておい
でました。その息子さんがもう高
校1年生の歳になってます。重症児
という、重い障がいの子どもの持
った親の思い、差別をなくしてい
きたいという思いを持った親の「あ
りんこクラブ」っていうグループを
作って取り組んでいます。そんな話
もしてくれ

ます。夏休みの平日になりますけれど、お家の人と色々な話をしてくれて、よかったら家族で参加してくれたら、うれしいなあって思うし、先生たちと参加してくれたらなあって思います。今日の午前・午後といろいろ思いが出てきた部分、またこの集会での学びをね、語ってくれたらと思います。じゃあ、中村先生、一言お願いします。



中村先生 みなさん、こんにちは。国府中学校の中村と言います。今の大湾さんと森口先生の話の後で非常に話しづらいんですけど、私がこの会に関わらせてもらったのは、今年が8年目になります。今、大湾さんの話や森口先生の話聞きながら、あと、この国府中学校の子3人、この会に今年初めて参加してくれて、その中学生が私の前で発表してくれている姿を見ながら、ああ、やっとここまで来たと思ってました。8年前、私がどうしてここに8年前に参加することになったのかというと、中学校2年生の、担任をしていたある女の子の話がきっかけです。T中学校に入った初めての年、中2の担任になって、その女の子が自分のお姉ちゃんの結婚差別の話を、私の前で放課後に、涙をポロポロ流しながら話をしてくれた、そのことが、私がそれから8年間、こうやってこの場に来て、自分のクラスや学校で人権の勉強を命かけてやらなあかん、自分の一生をかけてやらなあかん、自分のありのままの姿を出しながらがんばらないかんって、思わせてくれたきっかけです。人権フォーラムの時に、その中2の女の

子との出会いの話はしていこうと思うんですけども、これだけは言わせてください。私を変えてくれたのは、中学校2年生の女の子です。中学校の子たちの、本当の気持ちとか、心からの思いは、絶対に大人を変えます。みなさんの純粋な気持ちが、大人を動かしていきます。みなさんも、私もそうだったけど、中学生の時は全然こんな人前でしゃべれるような人間じゃなかったです。こんなたくさんの人の目が集まってくるところでしゃべるなんてって思ってた人間です。でも、こういうところで、みんなが一つになって、いろんな子と話し聞いて、思いを交わしていくっていうことで、ここの中から、一人でも二人でも、さっきの大湾さんの話じゃないけれども、一人でも二人でも変わっていく人っていうのが出てくるんだと思うんです。で、今日のこの後の午後の会でも、中学校の子たちが自分たちの思いを語っていく中で、また新しいつながりができて、出会いができて、今日はいい一日だったなって思えるような言葉が出てくることを、楽しみにしてます。私の話は人権フォーラムで、よかったらまた聞いてください。今日は、これから午後、みんなで一緒に語っていきましょう。お願いします。

森口先生 先生、ありがとうございます。またチラシの裏側にね、パネリストの思いが載せてあります。後でじっくり読んで、8月18日、鳴門の別の会場になりますけれども、そこでまた、いろんな思いが語り合えたと思います。時間をいただきました。どうもありがとうございます。

司会者 ありがとうございます。最後に大湾昇さんにもう一度大きな拍手をお願いします。